ロンドン学派のイントネーション研究
－ハロルド E. パーマーの音調研究－

長瀬慶來

C'est le ton qui fait la chanson.
話し振りが本心なのだ
【仏諺】

ハロルド E. パーマーは大正時代文部省により英国から招聘され，日本の英語教育の基礎を築いた著名な英語教育学者であり，現在でもその名を知る人は多い。英語教授研究所の創設を始め，オーラルメソッドの提唱等，英語教育の分野での功績は否定すべくもない。しかし彼の研究面での真骨頂ともいうべき分野は，音声学とくに音調（Intonation）研究であったことを知る人は多くない。本稿ではパーマーの音調研究の独創性と先見性をその著作を通して明らかにし，その後のロンドン学派の音声学研究の大きな柱の一つとなった音調研究の歴史における，パーマーの位置付けおよび貢献を明らかにすることを目指す。

キーワード：ハロルド E．パーマー，音調研究，ロンドン学派，音声学

【0】評伝—序にかえて

ハロルド E. パーマー（以下パーマーと略記する）は，1877年（明治9年）英国はロンドンで生をうけた。家庭教師による教育およびケント州のHythe校等で教育を受け，その後渡仏しフランス語を学んでいる。帰英後，父親の所有する地元のHythe新聞に勤め，記者・リポーターを勤めた。1902年にベルリッツの教師となり，ベルギーのVerviersに赴くが，翌1903年には，同地で自分の語学学校を創立し，英語とフランス語を教えた[1)]。外国語教育を通じて音声学の研究に興味を持ち始めていたパーマーはその後，1886年に創設され活発な活動を展開していた国際音声学会（以下IPAと略記）に，1907年入会している。Daniel Jones（以下DJと略記）の記述によると，1907年のIPA入会以降，パーマーはDJと書簡によるやりとりを頻繁にしていたようであるが，1912年のある日，オステンド・ドーバー間のフェリー上で偶然に目に入ったProf. Jonesという荷札に，思わず声をかけ，音声学の話に花を咲かせたのが，パーマーがDJに出会った最初であった。

1914年，Verviersがドイツ軍に占領されると，パーマーは妻と娘を連れてオランダ経由で命からがら英国に帰還した。Folkstoneで大陸からの難民のための英語学校を始めた後，ロンドンに上り，中学高校のフランス語教師を務めた。

1915年，ジョーンズの推薦によりUCLの夜間コースで言語教授法の講義を行ったところ好評を得た。そこで，DJは1916年，パーマーをUCL音声学科の講師（非常勤）に任用した。（このポストをパーマーは，日本の文部省からの招聘を受ける1921まで勤めることとなる）。担当科目はSpoken Englishで，同時にSOASの言語学講師も務めている（1917－20）。

1921年，欧米の教育事情を視察中であった沢柳政太郎（東京帝大総長，京都帝大総長，東北帝大総長，貴族院議員，文部次官，初代成城学園長等を歴任）は，ロンドンを訪問した際パーマーを知り，かねてより日本に於ける英語教育改善の必要性を痛感していた彼は，文部省の教育顧問としてパーマーをヘッドハントする事を決めた。また，パーマーを招聘するための財政的な基盤としては，松方幸次郎（松方正義の三男，川崎造船社長，松方コレクションの生みの親）の支援を仰いだと言われている。翌1922年（大正11年）3月，パーマーは文部省英語教育顧問として来日した。招聘条件は年俸壱萬圓であり，帝国大学総長年俸八千圓の時代としては破格であった。

来日するやいなや，パーマーは精力的に日本の英語教育の現状を視察し，翌1923年（大正12年）4月には，前述の沢柳政太郎および松方幸次郎の後援を仰ぐとともに，英語学会の有力者たち－市川三喜東京帝国大学教授，東京高等師範学校の石川林四郎および岡倉由三郎両教授，等－の支援を得て，英語教授研究所（現，語学教育研究所）を創設し，所長として，以後離日する1936年までの14年間にわたって，日本の英語教育に対し比類なき貢献をしている。パーマーが提唱したOral Methodは，戦後米国において，特にミシガン大学を中心として発展したOral Approachとしばしば比較されるが，構造主義言語学の発展に伴い，手段としてのOralから目標としてのOralへの変化はあるが，口頭教授の重要性をその中心に据えたという意味で，時代を先取りするものであったと言えよう。

本稿では，パーマーの音調研究をその中心として扱うため，彼の英語教育研究にはこれ以上立ち入らない。

パーマーは英語教育，英文法，音声学等に数多く（100

山梨医科大学英語学教室

以上）の著作を残している。しかしながら，その後の研究に与えたインパクトの強さという観点で見ると，特筆すべきは，音声・音調に関する研究－特に音調に関する研究－である。次に述べるように，特にこの分野で，きわめて独創的で重要な著作を出版している。

1917年にIPAに入会して以来ずっと音調に興味を持っていたパーマーは，1922年その研究を*English Intonation, With Systematic Exercises*として出版している。彼の音調研究は後述するように，非常に独創的で画期的なものであった。その後もパーマーは音調研究を深め，1924年の*A Grammar of Spoken English*，そして1933年の*A New Classification of English Tones*においてさらにその音調分析のシステムを進化させている。

1935年（昭和10年）には，上記の二冊の著作（*English Intonation, A Grammar of Spoken English*）の業績に対して，東京帝国大学から文学博士の学位を授与されている。

1936年のいわゆる２．26事件のあと，欧米人に対する逆風を肌で感じたパーマーは，ロングマン社からの顧問就任の要請を受け入れ，帰英の決心をする。離日に際して，パーマーは石川林四郎東京高等師範学校教授を第２代所長に任命すると同時にA. S. Hornbyを顧問として招聘した。全てのアレンジを済ませたパーマーは，その年の４月１日神戸港を出港し，二度と日本の地を踏むことはなかった。

帰英後はロングマン社の顧問として英語教育関係の著作を続けるとともに，講演等を行うこともあった。しかし健康に恵まれず，とくに一人息子のTristram（空軍のパイロット）が1942年７月に国に命を捧げて以来，そのショックで受けた心の傷から立ち直ることなく，失意のうちに，1949年11月16日永眠した。享年72歳であった。

【Ⅰ】音調の構造

パーマー以前（例えばH. Sweetの音調研究[2)]）は，音調研究において，音調群全体をいわゆる音調核とそれより前/後の部分に分けて分析することはなかった。

パーマーはその著*English Intonation* において次のように述べている，

> The conception of Nucleus, Head and Tail is my own;
>
> (*English Intonation, vii*)

すなわち，音調群を音調核，頭部および尾部に分けて分析した最初の音調研究者であった。

それでは，パーマーの言う音調群，音調核，頭部および尾部とはいったいどういうものであるのか，具体的に見ていく。

A. 音調群（Tone -groups）

パーマーは音調群を次のように定義している。

> For the purpose of determining and classifying the phenomena connected with intonation, we must consider that English speech is cut up into *Tone-Groups*. *A Tone-Group* may be defined as *a word or series of words in connected speech containing one and only one maximum of prominence.*
>
> (*English Intonation*, p. 7)

即ち，音調群とは，連続する発話において卓立（prominence）を一つだけ持つ語（の連続）のことである。次にパーマーは，音調群の境界を示すため次の記号を提案している。

> The limits of Tone-group may be marked by pacing the signs ‖ or | on either side of it, or two adjacent tone-groups may be separated by the same sign.
>
> (*English Intonation*, p. 7)

即ち，複縦線‖あるいは単縦線｜を用いて音調群の切れ目を示すと述べているが，パーマーが実際に用いているのは複縦線‖のみであり，単縦線｜は用いられてはいない。従ってO' Connor & Arnoldのような複縦線‖と単縦線｜の使い分けは存在しない。

B. 音調核（Nucleus）

パーマーは音調核を次のように定義している。

> Each Tone-Group contains a Nucleus which is the stressed syllable of the most prominent word in the Tone Group. The nucleus corresponds to what is usually called sentence-stress.
>
> (*English Intonation*, p. 7)

即ち，個々の音調群には１つの音調核があり，音調核とはその音調群のもっとも卓立のある語の強勢を受けた音節をいう。

C. 尾部（Tail）

パーマーは尾部を次のように定義している。

> Any syllable or syllables following the nucleus in the same Tone-Group is termed the "Tail" of the group.

即ち，同一の音調群内で音調核に後続する音節をその音調群の尾部という。

D. 頭部（Head）

パーマーは頭部を次のように定義している。

> Any syllable or syllables preceding the nucleus in the same Tone-Group is termed the "Head" of the group.

即ち，同一の音調群内で音調核に先行する音節をその音調群の頭部という。

したがって，音調群は次のように示すことができる。

音調群（Tone -Group）
＝頭部（Head）＋音調核（Nucleus）＋尾部（Tail）

【Ⅱ】英語の音調分析

次に，パーマーが，*English Intonation, With Systematic Exercises*（1922）で行った具体的な英語音調の分析を見る。

A. 核音調（Nuclear Tones）

パーマーは英語の核音調として次の４種を認め，それぞれTone-Group 1，Tone-Group 2，Tone-Group 3，Tone-Group 4と呼んでいる。

a）下降調（Falling）----------Tone -Group 1
実際には下降調を２種類提示：高下降調［↘］，
低下降調［⤳］
b）高上昇調（High-Rising）---------Tone-Group 2［⤴］
d）下降上昇調（Falling-Rising）----Tone-Group 3［∿］
e）低上昇調（Low-Rising）----------Tone-Group 4［⤴］

B. 強調（Intensification）
次の二つの下降調には下降の前に上昇する強調型が提案されている。

強調（上昇）下降調［∿］
強調（上昇）下降上昇調［∿］殆どの場合強調型，非強調型［↳］

C. 頭部（Head）
パーマーは頭部として次の４種を認めている。

①低頭部（Inferior Head）［—］下降調の前，［_］上昇調の前
②高頭部（Superior Head）［—］上昇調の前，［‾］下降，下降上昇調の前
③上昇頭部（Scandent Head）［ˊ］
④異種頭部（Heterogeneous Head）
上記３種の頭部の組み合わせ

D. 尾部（Tail）
パーマーは，尾部のピッチ型は次のようになると説明している。
1）下降核音調（Falling Nucleus=Tone-Group 1）の尾部は低ピッチに留まる。

この場合，話し手によっては，下降跳躍（falling interval：ピッチが跳ぶ）を用いることも多い。

2）上昇核音調（Rising Nucleus=Tone-Group 2 and 4）は分散して上昇を担う。

3）下降上昇核音調（Falling-Rising Nucleus=Tone-Group 3）は分散して下降上昇を担う。但し，単音節語の場合は，下降は音調核のみが担い，尾部は単に上昇のみを担う。

【Ⅲ】音調の型

次に，*English Intonation, With Systematic Exercises*（1922）に基づいて，音調群（Tone Group）全体のピッチ型を見てみると次のような組み合わせが可能となる。（以下Tone GroupはTGと略記）

頭部	核音調
①低	ＴＧ１
②高	強調ＴＧ１
上昇－③unbroken 連続上昇	ＴＧ２
－④broken scandent（繰り返し上昇）	ＴＧ３
	ＴＧ４
４種類　×	５種類＝20

但し，低頭部および高頭部とＴＧ４の組み合わせはないため，それら２通りを上の20種から除くと，計18通りとなる。

１．単音節――――９パターン
上の18種類の音調型を音節数に応じて単音節のものから見ていくと，単音節のものはつぎの９パターンになる。

a）低頭部＋ＴＧ１　（８種音調型のNo.１）
b）低頭部＋ＴＧ１強調
c）低頭部＋ＴＧ２　（８種音調型のNo.４）
d）低頭部＋ＴＧ３
e）高頭部＋ＴＧ１　（８種音調型のNo.２）
f）高頭部＋ＴＧ１強調
g）高頭部＋ＴＧ２　（８種音調型のNo.５）
h）高頭部＋ＴＧ３
i）上昇頭部＋ＴＧ４

２．２音節――――＋４パターン
２音節のものは次の４パターンになる。

a）上昇頭部＋ＴＧ１　（８種音調型のNo.３）
b）上昇頭部＋ＴＧ１強調
c）上昇頭部＋ＴＧ２　（８種音調型のNo.６）
d）上昇頭部＋ＴＧ３

３．３音節以上――＋５パターン
３音節のものは次の５パターンになる。

a）繰り返し上昇頭部＋ＴＧ１
b）繰り返し上昇頭部＋ＴＧ１強調
c）繰り返し上昇頭部＋ＴＧ２
d）繰り返し上昇頭部＋ＴＧ３
e）繰り返し上昇頭部＋ＴＧ４

以上の全ての組み合わせが可能であるとすると，前述のように，英語の音調型は計18パターンあることになる。

４．８パターンへの集約
上記18パターンは分析としては有用であるが，実際の教育のためにはあまりにも複雑であるため，パーマーは*English Intonation*, 86ページでそれらを８パターンへと集約している。移動をここで見てみると，ＴＧ１として１，５，10の三種類が残り，ＴＧ２として３，７，12の三種類が残っている。また，４，８，13，17はＴＧ３として一つに統合され，同時に９はＴＧ４として残っている。その結果，計８種類に集約されている。逆に，削除され

たものを見てみると，2．低頭部＋ＴＧ１強調，6．高頭部＋ＴＧ１強調，11．上昇頭部＋ＴＧ１強調，14．繰り返し上昇頭部＋ＴＧ１，15．繰り返し上昇頭部＋ＴＧ１強調，16．繰り返し上昇頭部＋ＴＧ２，18．繰り返し上昇頭部＋ＴＧ４，というように，核音調が強調タイプか頭部が繰り返し上昇頭部という，何らかの強調を含むパターンであることがわかる。すなわち，強調型が特殊なものとして削除されたものと考えていいように思われる(17は強調の有無に関わらずＴＧ３に統合されている)。

次に集約された８パターンの音調群の各々の型と文タイプごとの意味を詳述する

１．低頭部＋ＴＧ１［＿↘］

断言的平叙文(Categoric Statements)：卓立は殆ど核語に限定。
特殊疑問文(Special Questions)(＝Wh疑問文のこと)。
命令文(Commands)。
一般疑問文(General Questions)(＝Yes-No 疑問文のこと)。
孤立語で引用または対照されたもの(Isolated words when quoted or contrasted)。

２．高頭部＋ＴＧ１［‾↘］

平叙文(Statements)：卓立は頭部に分散。
特殊疑問文(Special Questions)：もっとも普通の型。
命令文(Commands)：もっとも普通の型。
一般疑問文(General Questions)：答えが反対であることを暗示する。

３．上昇頭部＋ＴＧ１［‿↘］

平叙文：生き生きした。卓立は頭部に分散。
特殊疑問文：生き生きとした。普通の型。
命令文：生き生きとした。普通の型。
一般疑問文：生き生きした。答えが反対であることを暗示する。
感嘆文(Exclamations)：強調型[‿∿]がもっとも普通。

４．低頭部＋ＴＧ２［＿↗］

平叙文：「それで何故？」(“Then why...?”)という暗示がある。
平叙文：疑い(doubt)とためらい(hesitation)を暗示する。
特殊疑問文：繰り返されたとき。
一般疑問文：卓立は核語に限定。
隣接音調群の核語を修飾する語あるいは語群

５．高頭部＋ＴＧ２［‾↗］

平叙文：快活な，異議を唱えるような調子。
命令文：快活な，異議を唱えるような調子。
特殊疑問文：おうむ返しの。
一般疑問文：もっとも普通の型。
おうむ返しの平叙文。

６．上昇頭部＋ＴＧ２［‿↗］

特殊疑問文：(生き生きとした)おうむ返し。
一般疑問文：生き生きとした。
おうむ返しの平叙文：生き生きとした。

７．ＴＧ３［∿］

平叙文］ 譲歩を暗示する。
命令文］ 主として対比に用いられる。

８．ＴＧ４［‿⌒］

暇乞いの挨拶。
平叙文：元気づけるような調子。

【Ⅳ】６パターンへの統合と記憶符号（ニーモニック）の導入

パーマーは，*A New Classification of English Tones* (1933)において，上記の８パターンをさらに６パターンに統合し，新たに記憶符号(ニーモニック)を導入した。

記憶符号(ニーモニック)の導入には，パーマーによると次の３つの利点があるという。

a) It makes possible the description and explanation of the English tonetic system in a concise and readily intelligible form.
b) It renders unnecessary (or less necessary) the use of technical terms.
c) It facilitates the tonetic analysis of texts.
(*A New Classification of English Tones*, p.2)

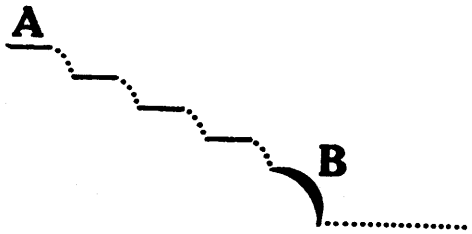
すなわち，①英語の音調体型の記述と説明がより簡潔で理解しやすくなり，②専門用語の使用が不要となるとともに，③テクストの音調分析を容易にする，という３つの利点があると言う。

また，上述の８パターンへの集約の場合と同様，簡略性のため，強調型と繰り返し上昇型は省略されている。

Ａ．６つの音調型

次にパーマーが提案した６つの音調型とその文タイプごとの意味を個別に見ていく。

1．滝型（Cascade）



もっとも頻度が高い
高頭部（階段状下降）［‾］＋低下降調［⤳］
‾Why ⤳not?

a）平叙文：宣言，提案
I ‾don't think it's ⤳true.

b）命令文
‾Come and sit ⤳down.

c）Wh疑問文
‾What do you want to ⤳do?

2．飛び込み型（Dive）

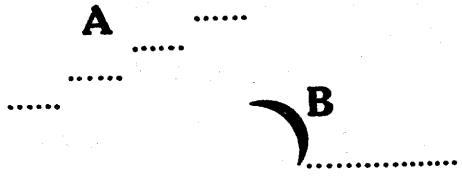
滝型の代替として用いられる
（助走としての上昇＋）高下降調［↘］

a）平叙文：断言，従って疑問文に対する答え，反駁（contradiction），抗議（protest）
I ↘see.

b）命令文：「その場合は，そうならば，・・・」という暗示
Don't ↘do it, then!

c）疑問文：「その場合は，そうならば，・・・」という暗示
Why did he ↘go, then?

3．スキージャンプ型（Ski-Jump）



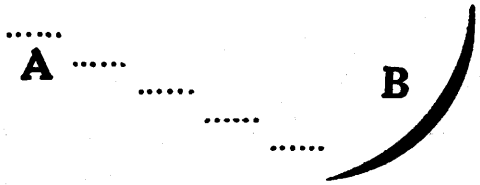
滝型および飛び込み型の代替として用いられる
上昇頭部［⌒］＋低下降調［⤳］

a）平叙文：コメント（comment），所見（remark），観察意見（observation），（熟慮の）意見（reflection）
That's ⌒just what I ⤳said.

b）感嘆文：大部分がこの音調型
⌒How ⤳strange!

c）命令文とWh疑問文でたまにこの音調が用いられることがある
論評（感嘆）命令文，論評（感嘆）疑問文と呼んでもよいもの
⌒How did you ⤳do it?

4．波型（Wave）



滝型についで頻度の高い重要な音調型
（準備下降［‾］＋）上昇調［⤴］
1）低頭部［＿］＋上昇調［⤴］
2）高頭部［‾］＋上昇調［⤴］
3）上昇頭部［⌒］＋上昇調［⤴］

a）Yes-No疑問文
‾Is it ⤴black?

b）繰り返し疑問文，繰り返しを求める時，おうむ返し
‾You re⤴fused it?

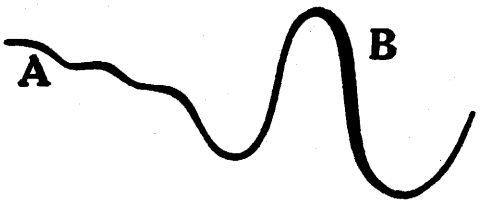
c）命令文：いらいらした（impatient），抗議調の（protesting）
‾Never ⤴mind.（Never ⤴mind.）（↘Never ⤴mind.）

【さらに研究すると，これは実際には下降［↘］＋上昇［⤴］の複合型だということがわかる，とパーマーは述べ，かっこ内に示したような実例を挙げている。】

d）平叙文：それで何故・・・？それで何故・・・だめなの？そう，それなら・・・という含意
You're not ⤴certain (so ‾why be cate⤳goric?)

e）平叙文：不完全な，未決の調子，あるいは話し手側の疑念とか躊躇いを示す。
It ‾hardly seems ⤴likely (but you never know).
It ↘hardly seems ⤴likely.

5．蛇型（Snake）



これまでの4パターンに比べて，頻度が低い。外国人学習者にとって習得がもっとも困難な型。

高頭部［ ¯ ］（下降頭部，低/上昇頭部）＋（上昇）下降上昇調［∿］（ＴＧ３）

a）平叙文：譲歩的あるいは調停的対照，反駁でalthough, but, because, however, even if, all the same等で始まる付加節を暗示

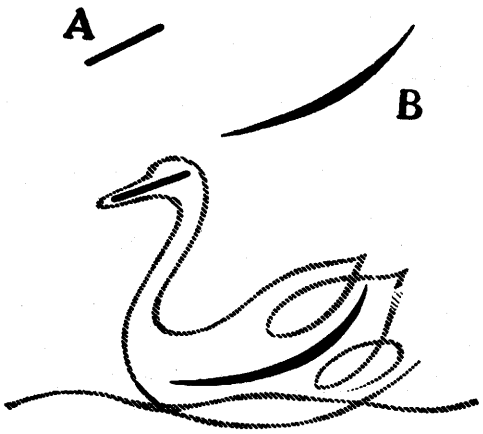
¯That's not what ∿I mean（although it may be what ↘you mean）.

b）命令文：調停的な，穏やかなあるいは友好的な警告，特に，Mind you...,とかTake care you...で始まるタイプで

¯Mind you don't ∿fall.

大部分の否定平叙文と命令文では，この型のイントネーションが用いられる

6．白鳥型（Swan）



英語の音調型でもっとも頻度の低いもの。

（高）上昇頭部［¯］＋低上昇調（ＴＧ４）［⌒］

全てがうまくいっている，話し手と聞き手の間に完璧な一致があるといった調子

安心させる（reassuring）調子

なだめるような（calming），やわらげるような（soothing）効果。そのため主として，幼い子供や気難しい病人に話しかける時に用いられる。

不適切に用いられると，大人にとってはいらいらさせる調子となる。

別れの挨拶（別れ際の最後の言葉）にもっともよく使われる音調

¯Good ⌒bye.

I ¯shan't be ⌒long.

以上６つに統合された英語の音調型を見てきたが，前述の８パターンに比べると（たとえば，以前の分類では第２パターン：高頭部＋ＴＧ１と言っても具体的なイメージが沸かなかったが，このシステムでは滝型と呼ばれ，その型がすぐ連想できる），教育的には遙かにわかりやすく覚えやすいものになっているといえる。

B．複合型

次に，上記の６パターンが組み合わされて複合音調型を作る場合を見ていく。

それには次に見るように，同じパターンが繰り返される繰り返し型と，異種パターンが交替する交替型とがある。

1．繰り返し型

まず繰り返し型を見ると，次の同格と付加・あと知恵の２種で用いられる。

a．同格

I ¯saw ⌐Brown, the ⌐lawyer.　滝型＋滝型

The ↘common or ↘garden variety.　飛び込み型＋飛び込み型

Not ↗Brown, the ↗lawyer?　波型＋波型

¯Not ∿Brown, the ∿lawyer.　蛇型＋蛇型

b．付加，あと知恵

He ¯spoke to ⌐me about it, ⌐yesterday.　滝型＋滝型

I was ↘interested in it, ↘very.　飛び込み型＋飛び込み型

Is it ↗green, or ↗blue?　波型＋波型

∿I did ; ∿you didn't.　蛇型＋蛇型

¯Good ⌒night, ¯sleep ⌒well.　白鳥型＋白鳥型

2．交替型

次に異種の音調型が交替する例を見ると，波型と３種の下降調および蛇型と３種の下降調の２タイプがある。

a．波型と３種の下降調

i）従属節の中の波型

When I went there ↗ yesterday, I saw my ↘ friend.　波型＋飛び込み型

I saw my ↘ friend when I went there ↗ yesterday. 飛び込み型＋波型

When I ↗ write, I ¯ use a ↝ pen. 波型＋滝型

I ¯ use a ↝ pen when I ↗ write. 滝型＋波型（本文中 ...when I write.は誤植）

ii）従属節相当語句中の波型

↗ Yesterday I saw my ↘ friend. 波型＋飛び込み型

I saw my ↘ friend ↗ yesterday. 飛び込み型＋波型

When ↗ writing, I ¯ use a ↝ pen. 波型＋滝型

I ¯ use a ↝ pen when ↗ writing. 滝型＋波型

In ↗ that case, don't ↘ buy it. 波型＋飛び込み型

Don't ↘ buy it in ↗ that case. 飛び込み型＋波型

Not being ↗ right, it must be ↘ wrong. 波型＋飛び込み型

On ↗ Sundays I ¯ generally go for a ↝ walk. 波型＋滝型

I ¯ generally go for a ↝ walk on ↗ Sundays. 滝型＋波型

Near ↗ here Pro ˘ fessor ↝ Beach lives. 波型＋スキージャンプ型

Pro ˘ fessor ↝ Beach lives near ↗ here. スキージャンプ型＋波型

In order to suc↗ ceed we must ↘ work. 波型＋飛び込み型

We must ↘ work in order to suc↗ ceed. 飛び込み型＋波型

He ↘ plays ↗ sometimes. 飛び込み型＋波型

↗ Sometimes he ↘ plays. 波型＋飛び込み型

I ˘ saw your ↝ brother last ↗ week. スキージャンプ型＋波型

Last ↗ week I ˘ saw your ↝ brother. 波型＋スキージャンプ型

iii）上記と類似のあるいは補完する機能を持つが，従属節あるいは相当語句中以外で用いられる波型

I saw my ↗ friend ↘ yesterday. 波型＋飛び込み型

↘ Yesterday I saw my ↗ friend. 飛び込み型＋波型

¯ If he ↝ did come it wouldn't ↗ matter much. 滝型＋波型

It wouldn't ↗ matter much if ¯ he ↝ did come. 波型＋滝型

I ˘ don't ↝ think so, ↗ somehow. スキージャンプ型＋波型

iv）参照（reference）機能を持つ波型。・・・と言えば（speaking of ...）とか，・・・に関しては（with regard to ...），・・・に関する限り（as far as ... is concerned）に相当。

↗ Edison was an in↘ ventor. 波型＋飛び込み型

v）対比（contrast）の機能を持つ波型。

↘ Monday, not ↗ Tuesday. 飛び込み型＋波型

vi）or, nor, and （そして他の類似の接続詞）で結ばれた２文のうちの最初の文で用いられる波型。この複合音調が接続詞の代わりをすることもある。

Is it ↗ black ¯ or ↝ blue?　波型＋滝型

No ↗ work, no ↘ pay. 波型＋飛び込み型

vii）列挙（enumeration）で用いられる波型。

↗ One, ↗ two, ↗ three, ↗ four, ↘ five.

波型＋波型 ...＋飛び込み型

b．蛇型と３種の下降調

上述の波型についての最初の５項目がそのまま蛇型にも当てはまり，意味効果のみが蛇型のそれに変わる。即ち，上述の単純蛇型の説明にあるように，平叙文：譲歩的あるいは調停的対照，反駁でalthough, but, because, however, even if, all the same等で始まる付加節を暗示する。

１．従属節の中

¯ When I went there ∿ yesterday, I saw my ↘ friend.

蛇型＋飛び込み型

2．従属節相当語句中
∿Yesterday I saw my ↘friend. 蛇型＋飛び込み型

3．上記と類似のあるいは補完する機能を持つが，従属節あるいは相当語句中以外で用いられる。
I ¯ saw my ∿friend ↘yesterday. 蛇型＋飛び込み型

4．参照
∿Edison was an in↘ventor. 蛇型＋飛び込み型

5．対比
¯ Not ∿ Tuesday; ↘Monday. 蛇型＋飛び込み型

【Ⅳ】結び

ハロルド E. パーマーの音調研究について，ロンドン大学音声学科創設者Daniel Jones教授は，パーマーへの弔辞で次のように述べている；

> Palmer had a most original and inventive mind. ...His first book on the subject, English Intonation, With Systematic Exercises, extended considerably our knowledge of this interesting branch of phonetics. It was full of original observations, and in it he demonstrated for the first time his ingenious system of tone-marks.
>
> 'A Tribute to Harold Palme' , Daniel Jones

すなわち，パーマーの開拓した英語音調研究はきわめて独創的であり，彼は時代を遙かに先取りしたパイオニアであった。彼の音調記号は R.Kingdon により改良され，その後の音調分析の基本となった。またニーモニックを用いた音調分析は O'Connor & Arnold でさらに発展させられ，花開くこととなる。

先に引用したパーマー自身の次の言葉，The conception of Nucleus, Head and Tail is my own （*English Intonation* vii）を借りるまでもなく，音調構造を頭部，音調核，尾部に分類したのはパーマーの独創であり，パーマーの音調研究の最大の功績であると言って良い。この音調の構造分析は，その後のR. Kingdon（1958），O' Connor & Arnold（1961, 1973），M. A. K. Halliday（1967），D. Crystal（1969）さらにはCruttenden（1986）等に見られるように，ロンドン学派の音調研究の基本として受け継がれている。

（平成13年８月20日於ダーラム大学）

註１：小川茅男（編），『英語教授法辞典』（三省堂）には，パーマーが1904年にベルギーのリエージュ大学を卒業したという記事が見られるが、在籍し，いくつかの科目を履修したのは事実であろうが、卒業という記述はおそらく不正確な情報に基づくものであろう。Daniel Jonesも娘のDorothee Andersonもそのことには触れていない。

註２：たとえば、H. Sweet は音調を次の５つのToneに分類している。

a）上昇調（rising）。
b）下降調（falling）。
c）下降上昇調（falling-rising）。
d）上昇下降調（rising-falling）。
e）平坦調（level）。

しかしながら、H.Sweetは音調核（パーマーの用語）とその前（＝頭部）と後（＝尾部）の音節を分離して考えることはなかった。

Harold E. Palmer 年表

1877年　英国ロンドン生まれ。
1907年　国際音声学会入会。
1912年　オステンド・ドーバー間のフェリー上でD.ジョーンズと出会う。
1915年　ジョーンズの推薦でＵＣＬの夜間コースで言語教授法の講義を行う。
1916年　ＵＣＬ音声学科（D.ジョーンズの下で）講師（非常勤）を務める（－21）。担当科目：Spoken English，同時にSOASの言語学講師兼担。
1921年　沢柳政太郎にヘッドハントされる。
1922年　（大正11年）３月文部省英語教育顧問として来日。*English Intonation, With Systematic Exercises* 出版。
1923年　（大正12年）４月　英語教授研究所（現　語学教育研究所）創設。
1924年　*A Grammar of Spoken English* 出版。
1933年　*A New Classification of English Tones* 出版。
1935年（昭和10年）　文学博士（東京帝国大学）。
1936年　帰英。
1949年　11月16日　永眠（享年72歳）。

References

Cruttenden, A. (1986). *Intonation.* Cambridge University Press.

Crystal, D. (1969). *Prosodic Systems and Intonation in English.* Cambridge: Cambridge University Press.

Halliday, M.A.K. (1967). *Intonation and Grammar in British English.* The Hague: Mouton.

_____ (1970). *A Course in Spoken English: Intonation.* London: Oxford University Press.

Kingdon, R. (1958a). *The Groundwork of English Intonation.* London: Longman.

_____ (1958b). *The Groundwork of English Stress.* London: Longman

長瀬慶來 (1993).「ロンドン学派のイントネーション研究とオコナー＆アーノルド『イギリス英語のイントネーション』－第２版（1973）を中心として－」. 佐賀大学英文学研究第21号. pp1－13.

_____ (1998).「Henry Sweetの音調研究－ロンドン学

派の音調研究のルーツ－」．ノートルダム清心女子大学紀要，外国語外国文学編第22巻第１号．pp60-89.

小川芳男（編）（1964）．英語教授法辞典．東京：三省堂．

Onishi, M. (1981). *D. Jones, H. E. Palmer and Phonetics in Japan.* Tokyo: Phonetics Society of Japan.

Palmer, H.E. (1922). *English Intonation, With Systematic Exercises.* Cambridge: Heffer.

_____ (1924). *A Grammar of Spoken English.* Cambridge: Heffer.

_____ (1933). *A New Classification of English Tones.* Tokyo: Kaitakusha.

_____ (1937). "a prɔpo de mark d ɛ̃tɔnɑsjɔ̃ (A propos de marques d' intonation.)" *Le Maître Phonétique,* No.60, p.60.

Sweet, H. (1877). *A Handbook of Phonetics.* Oxford: Clarendon Press.

_____ (1888). *A History of English Sounds.* Oxford: Clarendon Press.

_____ (1890). *Primer of Spoken English.* Oxford: Clarendon Press.

_____ (1891). *A New English Grammar : Logical and Historical, Part 1, Intoroduction, Phonology, and Accidence.* Oxford: Clarendon Press.

_____ (892, 3rd edn. 1906). *A Primer of Phonetics.* Oxford: Clarendon Press.

_____ (1910, 2nd edn. 1929, revised and supplemented) *The Sounds of English: An Introduction to Phonetics.* Oxford: Clarendon Press.

O'Connor, J.D. and Arnold, G..F. (1961, 2nd edn. 1973). *Intonation of Colloquial English.* London: Longman.

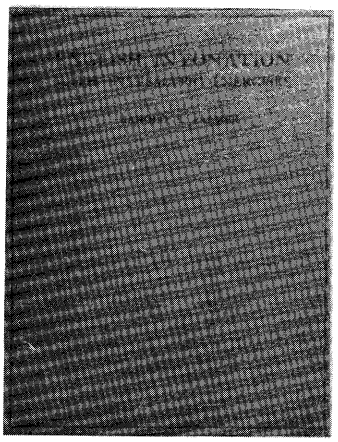
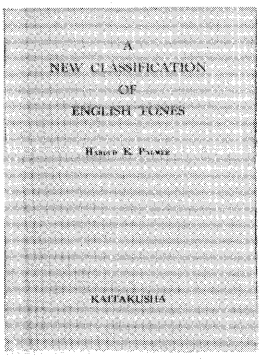
Abstract

The London School of Intonation Studies

-Harold E. Palmer on English Intonation-

Yoshiki Nagase

Harold E. Palmer is a well-known authority on the methodology of teaching English as a foreign language. At the invitation of the Japanese Ministry of Education, H. E. Palmer came to Japan and laid the foundation of English Education in Japan. His theories and work are often cited and discussed even today. We cannot, of course, deny his contribution in the area of TEFL/TESOL. However, not many know the fact that his true genius in research was displayed in the field of phonetics, particularly in intonation studies. This paper tries to elucidate the foresight and originality of H. E. Palmer's intonation studies through his work, and define the evaluation and contribution of H. E. Palmer in the history of intonation studies which became one of the mainstream areas of research in the London School of Phonetics.

Key words : Harold E. Palmer, Intonation studies, the London School of Phonetics, Phonetics .

Department of English
Yamanashi Medical University
1110 Shimokato, Tamaho,
Yamanashi 409-3898
e-mail: ynagase@res.yamanashi-med.ac.jp